

和解のコミュニティ

—アメリカ社会の人種主義と教派主義に対する挑戦—

青柳清孝

はじめに

アメリカのプロテスタント主流教派の牧師達は1960年代にベトナム反戦・公民権運動に積極的に立ち上がっていった。しかしこれに対してあまりにも社会的・政治的現実に関わりすぎるという批判が教会内部からおこり、主流教派から離れる人を多く生みだし、衰退を招く結果となってしまった。^①

この論文は1960年代に生まれ、社会的現実に関わろうと意図してきたあるユニークな教会の物語である。

私は1988年の3月から8月までピッツバーグ大学のすぐ近くにある The Community of Reconciliation という教会に通っていた。この教会名にかりに「和解のコミュニティ」という日本語訳をあてておくことにしよう。この「和解のコミュニティ」はエキュメニカルな精神に基づいた教会であった。ピッツバーグには多種多様なエスニック教会があり、かつて私が西部や南部で暮らしていた頃に慣れ親しんでいたような黒人の教会ももちろん多数あった。しかし、今回私にこの「和解のコミュニティ」を選ばせたのは、ピッツバーグにおそらく何百とある教会の中で、原則的にまた実質的に人種統合の行われている唯一ともいえる教会であったからである。現在エキュメニカルな教会は教勢からいってこれ以上衰えることはないほどどん底にあるといわれている。^② だとすると私の通ったこの「和解のコミュニティ」もそのひとつであるからそうした状況にあったと仮に考えておく

ことにしよう。この教会の存在を知ったのは、同じ大学関係者で黒人の中産階級に属するインフォーマントからであった。しかも好都合なことにこの教会は私のアパートのすぐ近く、隣といってもいいところにあった。私はこの教会の塔の前を歩いて毎日のように大学へ通っていたにもかかわらず、長い間それと気がつかなかった。それには1つ理由があった。この塔は十字を掲げていないのである。しかもその塔を回り込んでアパートの隣のビルの入口にThe Community of Reconciliationと書かれた黒板がおかれてあるだけである。近代的なビルの入り口の奥に教会がある。十字が屹立し、古色蒼然とした建物の教会を連想していれば誰もここが教会とは気がつかないであろう。賛美歌が洩れて通りに聞こえることもなく、その近辺にはなんの教会らしきも感じさせるものはない。

教会の入り口で渡されるパンフレットの見出しは「もしあなたが改革的教会を求めているのならば、The Community of Reconciliationへどうぞ」と書かれ、挿し絵にはモダンなビルとその隣に長方形の塔が描かれている。

パンフレットを開けると真中に1つの輪を握る3つの手首が描かれ、皮膚の色は白、黒、ブラウン。輪の真中にはさらにぶどう酒用グラスがある。その絵の下にはエペソ書2章14-16節が引用されている。

「キリストこそ私たちの平和であり、2つのものを1つにし、隔ての壁を打ち壊し、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは様々の規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは2つのものをご自身において新しい1人の人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を1つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」

そのさらに下方にエペソ書2章20-21節が書かれている。

「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方において、組合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、」

反対に絵の上にはガラテヤ書3章28節があげられている。

「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜならあなたがたはみな、キリスト・イエスにあって1つだからです。」

左の余白には

The Community of Reconciliation は、

温かく手をさしのべる、

人種に関わりなく、

誰でも受け入れる、

工夫した礼拝式をもつ、

超教派的である—この教会はアメリカ・バプテスト教会、

クリスチャン・チャーチ (ディサイプルス)、

長老派教会USA、合同キリスト教会、

合同メソジスト教会と関係を持つ、

という5つの特徴を持つと書いてある。

挿し絵の左側には、この教会の5つの特徴が日曜学校のクラス、クワイア、聖書研究などに盛られていることが述べられ、更に、オークランドという教会—文化—病院地区のまたとない場所に建てられた新しい教会であることが宣伝されている。

教会のパンフレットにあった(教会と文化と病院の)オークランドとは、ピッツバーグ大学、カーネギー・メロン大学、カーネギー研究所、メロン研究所、自然史博物館、長老派大学病院などの諸施設のある一帯である。その真ん中を東西に走っているのが五番通りで、これを西にバスで20分ほど行くとダウンタウンに至る。ダウンタウンは丁度、モノンゲーラとアレゲーニ川の合流点の三角形地帯を占めていて、合流点から先はオハイオ川になっている。ダウンタウンの一帯は今ゴールデン・トライアングルと呼ばれている。かつて鉄鋼の町として栄えたピッツバーグは世界的競争力を失い、1970年代には完全に没落してしまった。しかし、都市再興運動(それをルネッサンスと土地の人々は名付けているが)がおこり、ピッツ

バーグは一変した。今やピッツバーグは調査と開発機関に関しては全米で第3位、多国籍企業の中央事務所の数などは第2位、企業の中央事務所数では第3位、ニューヨークとシカゴ間では最大の金融センターとなったのである。⁽⁵⁾ スカイスクレイパーの偉容と輝きはまさにゴールデン・トライアングルの名にふさわしい。

ピッツバーグに最初の溶鉱炉が設けられたのが1806年である。⁽⁶⁾ ピッツバーグといえばカーネギーやフリック、そしてメロンの財閥の名を思い出すように、彼らは初期の産業家としてピッツバーグの工業化に貢献した。そしてその労働力を担ったのは東欧系の新移民であった。彼らと並んで黒人も労働力に加わったが、非効率的で望ましくないというレッテルを貼られ、スラブ系移民の方がはるかに歓迎された。⁽⁵⁾ その後黒人に対する差別は次第にあからさまになっていったという報告があり、1940年のピッツバーグ都市同盟の調査では53労組のうち5つのみが黒人の組合員を擁していたにすぎず、15は黒人を労組規約の上で排除し、33は黒人の労組員はいないという結果が明らかにされている。⁽⁶⁾

先の財閥の名前に象徴されるように1870年代には旧移民系のエリート階層がすでに特定地域に集中的に居住し、1880年代から90年代には中産階級居住地域、そして1880年代からはブルーカラーの居住地域が形成されている。ピッツバーグの地形は丘と川に特徴づけられていて、その特徴を生かした社会、人種、エスニック別の住み分けがみられるという。⁽⁷⁾ 英国、アイルランド、ドイツ系が上、中層、ポーランド、ハンガリー、クロアチア、ロシア系ユダヤ人など東ヨーロッパ系やイタリー系、黒人が、中、下層を構成している。

多様なエスニック集団は同時に、エスニック教会をそれぞれの地域に発達させることになった。ことに印象的なのは、東欧系諸集団が居住する地域、サウスサイドには様々な形状と色の輝きを持った教会の塔がみえることである。また私の住むオークランド地域にもアイルランド系住民のセントポールカトリック教会がある。この教会には11階建てのこのアパートよ

り高くそびえる大尖塔と幾つもの中小の尖塔があり、その荘厳さと重厚さは他を圧している。これらの教会がそれぞれの集団の定着化の上で果たした役割は大きく、エスニック・アイデンティティの強化に役立っているといつてよいであろう。

黒人の教会についていえば⁷⁸⁾ AME Bethel (アフリカン・メソジスト・エピスコパル・ベテル) 教会と AME Zion (アフリカン・メソジスト・エピスコパル・シオン) 教会が、ピッツバーグの黒人地区 (Hill District) に出現した最初の教会である。1850年当時同市には黒人が約2,500人居住し、Hill 地区にはそのうちの約1,000人が集中していた。

これら初期の黒人教会の役割はヨーロッパのエスニック教会と同様であった。それから30年後には Hill 地区の黒人は8,300人に増大し、新しく10以上の黒人教会が建てられた。1900年までには同地区に14の黒人教会が存在し、それは市全体の半分にあたる数であった。

ピッツバーグの黒人の歴史は1900年以前に遡れるが、実質的な流入が起こったのは1915年以降とされているから、第一次世界大戦後に南部から北部へと黒人が大量に移動した時期にあたる。1960年には黒人人口は10万に達し市総人口 (60.4万) の16.7%を占めた。それ以降市総人口は減少し始めたが黒人は僅かながら増加を続け、1980年には市総人口 (42.4万) のうち24.0% (10.2万) を占めている。⁷⁹⁾

1950年代以前はピッツバーグ市には3つの黒人地区が存在した。ダウントウンに隣接する Lower Hill 地区 (L地区)、そこから坂を登った Upper Hill 地区 (U地区)、そして市の東部に位置する Homewood-Brushton 地区 (H-B地区) であった。しかし1950年代のダウントウンの再開発はL地区にもおよび、1,551家族がそこから転居を余儀なくされ、大部分はH-B地区へ移動していった。この時をもってL地区は消滅してしまった。一方U地区には1950年代に大部分の個人住宅が取り壊され、連邦政府による低所得者用アパートが建てられ、1960年には221家族が入居した。H-B地区では黒人が流入するに従い、白人居住者は流出していった。⁸⁰⁾

黒人住宅地はその後、社会階層の複雑化に伴い、上記2地区以外にも形成されてきている。Plotnicovによると、⁽¹¹⁾ それらは Shenley Heights, Willkinsburg, North Manchester, Runkin, Bradock で、このうち Shenley Heights は Sugar Top と呼ばれ、格別裕福な黒人が住んでいるという。Worthington は⁽¹²⁾ Sugar Top は以前、Strugglers Road と呼ばれていたところであったが、やがて黒人の中産階級が住むようになって、俗称も Sugar Top にあらたまると述べている。

1 和解のコミュニティ

〔成立まで〕

1968年、ピッツバーグ長老会は、University and City Ministries（仮に大学・市牧師会と訳す。）という6教派からなる組織をつくった。そしてその事務局を Bellefield 長老派教会⁽¹³⁾の5階建ての塔に置くことになった。注目すべきは6教派が力を合わせ、また、黒白という人種の境界線を越えて伝道を開始することに決定した事実である。事務局がピッツバーグ大学に隣接し、カーネギー・メロン大学に近いところから、大学教職員、学生とオークランド住宅区域住民を福音伝道の対象とすることとした。

そして超教派的かつ超人種的に福音を伝える教会として同じ1968年に大学・市牧師会の一部として作られたのが「和解のコミュニティ」なのである。リーダーたちは教会としないでコミュニティという表現を選んだ。⁽¹⁴⁾

実は人種の境界線をこえる原動力となったのは、長老派諸教会の上部組織であるピッツバーグ長老会ではなく、黒人U地区にある黒人の Grace Memorial Presbyterian Church（以下、グレイス教会と省略）の牧師 Harold Tolliver（-1982）と、白人側では Bellefield 長老派 Presbyterian Church（1886年創立、以下ベルフィールド教会と省略）の James G. Gardner と First United Presbyterian Church の Bruce Swenson という若い牧師であった。

Tolliver 牧師は何故人種統合の教会を望むようになったのであろうか。

妻の Elva の話および彼自身の言葉として記録されているものによると、⁽¹⁵⁾ 南部で少年の頃通ったアフリカ・メソジスト・エピスコパル教会の牧師（黒人）の言説とピッツバーグで通った学校の白人女性の校長の親切な態度が彼を動かしたという。この牧師は、白人の差別の故に黒人が自らの教会を作らなければならなかったが、兩人種が一緒にならなければならないと常日頃述べていたこと、また白人女性校長は人種や皮膚の色を越える心を持っている人が白人にもいることを彼に教えたという。

彼はバージニア生まれ、義母によく扱われず、ピッツバーグの大オバのところに預けられ、やがて Western Seminary（エピスコパル派）で神学を学び、牧師への道を歩んだ。グレイス教会に彼は牧師として37年間にわたり在職し、優れた指導者として多くの会員に親しまれたらしい。

ところでこのグレイス教会というのは1868年に組織され、教会はダウントアウンに近い黒人L地区のアーサー通りに面して建てられた。1940年にはL地区からU地区に至る途中センター通りに移転し、さらに1948年U地区のアイオワとプリンモア通りの角に移転した。このU地区の教会を訪れると、礎石に1915年という年が刻まれている。実はこの年はここに Shenley Heights Methodist という白人の教会が建てられた年であり、この教会の建物をグレイス教会が買取ったのは1948年であった。

当時、すなわち第二次大戦後、この地域に黒人が流入してきたため白人が郊外に移動しはじめ、この白人の教会も移転する準備をしており、他方グレイス教会側は従来の教会より立派な建物を求めていたところであった。当時グレイス教会のあるU地区は黒人地区になりつつあったが、その中においてグレイス教会は時には800人もの人を集めたという。

U地区から移転してのち、Tolliver 牧師は会員の協力を得て、黒白合同のベスパサービスを企画した。これにはおもいもかけず Shedyside 長老教会から副牧師派遣の申し出を受けることになった。この教会は裕福な白人地区にある白人の教会である。サービスには市の広範な地域から100人、多い時には150人の参加があって月1回のサービスを4年間にわたっ

て行うことができた。⁽¹⁶⁾ また長老派の白人3教会と黒人3教会（グレイス教会を含めて）の間で1963年には年次教会員交換計画が発足した。⁽¹⁷⁾ この計画に加わった家族は1年間相手の教会にメンバーシップを移した。しかし、白人教会員の中にはこの計画に反対し、教会を去るものも出たという。そしてこの種の交流の試みは60年代の全国的な激しい人種衝突、急進的黒人の分離主義的運動の影響を受けて挫折してしまった。

Tolliver 牧師の信念はしかし、それで揺らぐことはなかった。彼は教会が社会的・文化的・民族的分離に加担してきた罪人であったことを認め、分離された人々が一緒になればやがてお互いの憎しみや衝突は消えるという強い信念を持っていた。Tolliver のこの信念と希望を知ったのが Gardner と Swenson であった。2人の若い牧師はオークランドで教会の基礎を広げるためには人種の壁を取り払う必要を感じていた矢先であった。2人は Tolliver 牧師の意見を求め合同の具体策を練っていくこととなった。

合同の提案がベルフィールド教会とグレイス教会とでなされた。ベルフィールドの教会員の反対派は教会を去り、ピッツバーグ大学により近く、五番通りに面した場所に移り、そこをベルフィールド・プレスビテリアン教会とした。合同に賛同したのは僅か3～4家族であった。⁽¹⁸⁾

一方グレイス教会では Tolliver 牧師が合同の件を図った。彼は強力でかつ信望の厚いリーダーであったにもかかわらず、投票の結果はグレイス教会に残るものと“丘を下り”彼にしたがってベルフィールドの有志と合同するものとに分かれることになった。実は投票は2回行われた。第1回目では賛成が多数であった。しかしその直後に役職者は新しい教会では役職を失い、力を失うという危機感を抱き、2回目の投票を要求し、最初の意志をひるがえしたという。⁽¹⁹⁾ 合同に同調し Tolliver 牧師とともにグレイス教会を去ったのは結局90人位で、35人位がとどまることになった。⁽²⁰⁾ 黒人教会での牧師は一般に白人が考えている以上に尊敬され、ステータスの高い存在であるとすれば、合同という期待以上に彼のリーダーシップに

従ってベルフィールドにきた教会員も少なくなかったであろう。ともかくも「和解のコミュニティ」が結成されたとき白人と黒人は約半々であった。⁽²¹⁾

〔合同に伴った人種問題〕

モダンなビルに入ると待合室のような雰囲気的空間があってそこから扉1つ隔てて礼拝堂がある。中央の説教台に至る通路の両側に5～6人掛けの木製ベンチが10ヶ位ずつ並べてあり、後方右側にオルガンが1台おいてある。聖歌隊は10人位でオルガンより前、右側に位置する。参加者は平均して70人で黒人より白人がいつも少し多い。夏期には多くの人が休暇旅行に出るため参加者数は少なくなる。家族連れ、夫婦の参加者も多く服装はフォーマルですわる席は大体決まっている。私は、知り合いの黒人から大学関係者として紹介されて通うようになった。この人はここの教会員ではないが毎回のように出席するし、知人が多い。

牧師は白人の女性でその共同牧師として黒人の若い女性がいる。白黒混成の聖歌隊の歌は南部黒人教会の歌の響きに似ている。祈禱は自発的に人数に制限なく行われる。献金は説教台の上にある箱のところまで各自席をたって列を作り、行う。説教は2人の牧師の他に、時たま他所から招かれて行われるが、説教の内容は社会問題に触れることが多い。賛美歌の性別用語は用いられない。礼拝が終了すると大多数の人が礼拝堂から1階下の部屋に移り、茶菓のサービスを受け、ひとしきり社交が繰り広げられる。この機会は私にとって会員個人々人を知るよい機会であった。全体的な印象は一言でいえば自由な雰囲気に満ちた教会といえるであろう。

南部や西部で黒人だけの教会に慣れ親しんできた私には、人種の壁がないこの教会の自由な雰囲気のインパクトは大変大きかった。さらに礼拝のスタイルも目新しいものであった。

この教会が出発した当時これを実験と評した人がいた。この教会に初めての私にもそう思えた。しかしすでに設立以来20年継続してきたのである。白人と黒人の有志による合体であるにせよ、この20年間に克服し、あるい

は調整されるべき問題が少なからずあったのではないかと予想される。1982年にはこの合体教会にさらに4つの教派が加わって超教派的教会となったのである。その準備作業として「和解のコミュニティ」の代表者と4教派の代表者の計10人が委員会を組織し、3年8カ月にわたる議論を重ねてきたのである。⁽²⁾ 人種的合体による問題、異なる教派的慣行や規則の調整、さらに教会組織の運営面での役割分担やリーダーシップなどの問題がどう解決されようとしたのであろうか。

実際にどのような事柄が問題として意識され、議論されてきたのであろうか。同教会10周年に特集された小冊子 “We’ve Come This Far By Faith”—Oral Histories of the Beginning(1987)がそれを直接間接に明らかにしてくれるので、まずここで引用してみたい。小冊子の編者は教会員の中から黒人6人(3夫婦)と白人4人(1夫婦を含む)を選び、インタビューの形で彼らの声を聞いている。ごく要点だけを意識して以下に紹介しよう。

Tolliver 牧師の発言から

(Tolliver 黒人牧師は「和解のコミュニティ」の最初の牧師を務め、のち名誉牧師の称号を与えられた人。)

- i) グレイス教会は黒人の教会として、形式性よりは伝統によって培われてきたものを重視してきたが、この新しい教会では、聖餐式、報告、献金、音楽について、グレイス教会の場合と異なる形式や内容が採用されることになった。
- ii) 諸委員会活動が次第に白人のリーダーシップによっておこなわれるようになったことは問題である。

McCrays 夫妻の発言から

(Tolliver 牧師と一緒にグレイス教会から参加)

- i) 我々は(黒白)一体であるはずなのにゴスペルコウォリアは全部黒人であるのはおかしい。(妻)
- ii) 白人にリーダーシップが偏りがちである。

- iii) この教会が初期のころ持っていた公民権のための闘争力、エネルギーと努力は残念ながら今はない。

Harrison 夫妻

(Tolliver 牧師と一緒にグレイス教会から参加)

- i) 黒白統合のことに心を奪われすぎ、教会にとって必要な霊的な問題がないがしろにしてしまった傾向がある。
 - ii) 世俗にあまりかかわりすぎる。教会は礼拝の場だ。(妻)
- J. Opie (大学教員。白人。ベルフィールド教会から参加)
- i) 教会が学園に近接したところがありながら、なぜ若い人が来ないのだろうか。
 - ii) この教会がはじめにもっていた開放性が少し後退したようだ。

Henry Freeman

(「ピッツバーグ家族と子供のための社会奉仕機関」前専務理事，白人)

- i) 最初の頃は新しい教会として、何々教派の改訂版などということは少しもなかったのに、今は少しばかりこり固まった長老派かメソジスト派改訂版なのかといったような印象をうける。
- ii) 以前はもっとオープンだった。
- iii) ここ4～5年、いい加減な発言があっても誰も何も言わない。

Maddocks 夫妻

(夫は郵便局員。カトリックであったが一時教会を離れ、「和解のコミュニティ」ができるとこれに参加した。妻はこの教会設立当時の会員。白人)

- i) ベルフィールド教会には大学生がいたが「和解のコミュニティ」にはいない。何故なのだろうか？(妻)
- ii) ここの教会員は神学的議論をしないので刺激的ではなく、そのことが不満である。

以上の指摘の共通点を拾えば、合体という新しい試みに期待して集まっ

た人々は、ある程度はその結果に満足しているが、同時にせつかくの試みが硬直化してきていることを指摘している。「和解のコミュニティ」は、人種を越え、教派を越えて結成されてきたこと、開放的であること、社会的出来事にかかわること、そして既成の教会のような組織の硬直化を避けることを求めて出発した。しかし硬直化はまさにそのある面で起こってきていると指摘されている。

II 1988年の時点で

私がこの「和解のコミュニティ」の存在を知り参加することになったのは1978年からさらに10年たった時点であった。その時に観察できた事実を上述の諸問題に関連する範囲でここに書き留めておきたい。

i) 礼拝の形式とスタイルのうち、報告、祈禱、聖餐式については基本的に変化はない。まず、報告は、参加者は誰でも皆の前に進み出て自らの親族も含め、他の会員の近況などを伝え、喜びや悲しみを分かち、また祈りのうちに憶えてもらうことを願う。この形式は従来からのものである。祈禱も、参加者は、誰でも自由に立って何人でも行うという形式は従来からのものである。聖餐式は、任命牧師のみがこれを取りおこなうことができる。「和解のコミュニティ」に参加した教派がすべてそれを規則としてはいなかったが、「和解のコミュニティ」は諸教派の規則のうち一番厳格な規則を採用することで参加教派の同意を得ることにした。聖餐式に関しては諸教派が一致していた点は、パンとぶどう酒がキリストの体と血を象徴するとしていた点である。⁽²⁾ 聖餐式は出席者全員が参加して行われる。しかしそれは長老派では認められていなかったことであり、問題として感じられたと Elva (Tolliver) は述べている。全員参加の聖餐式において、人々は礼拝堂いっぱい広がり輪を作り、パンとぶどう酒をうけるが、パンは大きな塊から一人一人ちぎってこれをとる。「それはあなたの愛のために裂かれたのであり、ぶどう酒は我々の生命の中へと神の愛の賜物として流れる。—」と唱えられる。

聖歌と献金については20年の間に変化がみられたようである。音楽のスタイルは人によって好みがあり、調整を要する問題であったことが Tolliver 牧師の発言で知られる。ゴスペルタイプの音楽が好きな人とそうでない人がいたので、以前はゴスペルソングも歌ったが、プロテスタントの多くの教会で一般的な賛美歌を選ぶという時期があった。そしてゴスペルソングは祈禱会で歌うようにした。多くの黒人は親が歌っていた古い賛美歌を歌うことで感情的な高揚を覚える。彼らはゴスペルソングに慣れ親しんできたから今の現代風の歌に適應するのは難しいという。また、歌にあわせて手拍子をした人もいたが彼はそうした表現を抑えたという。

1978年の McCray 夫人の発言には、人種統合の教会でありながら、ゴスペル聖歌隊が黒人だけというのはおかしいと指摘している。1988年には時折ゴスペルソングが礼拝で歌われており、白人もこれに加わっていた。

献金の形式も変化したものの1つである。それは1978年までに特定額を義務化したり、要望したり、あるいは任意としたり、いろいろ試みられたというが、1988年には各自が自発的に説教台（テーブルがあるのみ）の献金箱のところにおいて献金を行うという方式がとられていた。額についてもきまりはない。洗礼の形式について「和解のコミュニティ」は、振り水、聖水、浸礼のうち、受洗希望者の選択によって決める方式を最初からとっている。各教派の伝統を容れたというべきであろう。

ii) 1978年の例の特集小冊子において、人々はしばしば構造という表現を用いている。その使われ方の文脈を見ると、教会組織の柔軟性と硬直性を指し示しているようである。構造化が進むことを望ましくないと思っている教会員がいると共に、構造化がある程度行われなくても問題であるとする人もいる。前者の場合は構造化が進むことによって柔軟性の失われることが懸念され、それに縛られてしまうと感じる人々であろう。後者の場合に人々は特に、組織の中の諸要素の位置づけと関係してその表現を使用しているように理解される。例えば、日曜学校や教会学校についてそれらがどの程度構造化される必要があるかに関心がある。

「和解のコミュニティ」全体としての構造化という点で見ると、諸教派の全体組織であるがゆえになんらかの妥協、調整が必要であったろう。

「和解のコミュニティ」には12の委員会があり、それぞれに委員長がおかれている。委員会の上には教会会議 (consistory) があって正、副議長、書記、会計の役職委員各1名がおり、そのほかに10人がこれを構成している。12の委員会のひとつには、Judicatory (仮に規則管理委員会と訳す) がある。これは「和解のコミュニティ」が諸教派の合体組織であるから、諸教派間の一種の仲介、調整機関と考えられる。委員会にはまた、都市と平和問題と「和解のコミュニティ」の関わりを考える委員会 (Urban/Peace Committee) があり、社会的問題に強い関心を「和解のコミュニティ」が持っていることを示している。

iii) リーダーシップについてはそれが白人に偏りがちであるという指摘が1978年の小冊子で行われていた。具体的には委員会活動にその傾向があるということであった。1988年8月現在12の委員会の委員長を人種別にみると、白人が9人黒人が2人で、残る1つの委員会は白人と黒人の2人が委員長であった。委員会の中には臨時に組織された牧師候補者選考委員会があり、白人4人と黒人2人がこれを構成していた。

次に教会会議の人種構成をみてみよう。6月中旬に会議構成員の交代があったので交代前と交代後と比較すると次のようである。

	交代前	交代後
議長	白人	白人
副議長	白人	黒人
書記	黒人	(不明)
会計	白人	白人
他の構成員 (白人)	5名	6名
(黒人)	5名	2名
計		
白人	8名	8名
黒人	6名	3名
不明		1名

交代後副議長に黒人が任命されたのは注目すべきであるが、全体として黒人数が減少している。1988年現在においても依然として白人にリーダーシップが傾斜しているということを推測させる。

毎日曜教会に集まって来る白人と黒人は子どもを除き、平均して白人が40人前後、黒人が30人前後である。この数のみを前提にすれば、もう少し黒人の役職者がいてもいいということになる。

委員長の選択が人種によって左右されることがあるとすれば、この教会にふさわしくないであろう。しかし、白人が黒人より、よりよく委員会の役割をリードすることができるということは有り得ることだろう。その理由はピッツバーグ市が完全に人種の平等が達成された社会ではないからである。その状況に戦術的に対応する必要に迫られことも考えられる。事実12の委員会での外的折衝を要する性質のものは白人が委員長である。一方教会内で主として役割を担う場合には両者がこれを分担するのが望ましい場合もあろうし、人種に関わりなく能力を重視する場合もあろう。

牧師の場合どのような考慮がその選択に必要なであろうか。私がこの教会に参加し始めた頃、たまたま牧師を選考する作業が進められていたので選考上の手続きと基準について知ることができた。このことを紹介する前に少し過去の様子を振り返ってみたい。

Tolliver 牧師が第一線を退いてから「和解のコミュニティ」は4人の黒人牧師を迎えている。しかしその4人のいずれも長続きしなかった。1人は再婚を機にサンフランシスコへ転居し、1人は病気が原因で辞めている。4人はいずれも男性であるが、黒人で男性の牧師を迎えるというのは大変難しいという。ひとつには「和解のコミュニティ」の給料が安いせいかもしれない。

Melana Amaker は1988年初めより、白人の現 Gail King 牧師の共同牧師として臨時に「和解のコミュニティ」に任用された神学生の黒人女性である。Melana が任用される前にもう1人臨時の女性牧師 Kris Bauaman が働いていた。Kris は任用予定の牧師が来るまでということであったがその牧

師は急に来られなくなり、Krisも辞めてしまった。従って臨時に次ぐ臨時という異例な事態が生じた。

Melanaは以前、Gailに招かれ、「和解のコミュニティ」で説教をする機会を与えられた。その後も何回か説教の機会があって任用されることになったという。臨時の学生牧師とはいえ、私がこの教会に参加していた6ヶ月間に、MelanaはGailより説教の回数を多く受け持っていた。しかし、Melanaは8月末をもって辞めることになっている。というのは9月から着任可能な牧師が出てきたからである。6月になって牧師選考委員会はその件について報告をした。候補者は黒人女性牧師で、まず6月17日（金）夕方、候補者自身の選ぶ聖句に基づいて聖書研究を発表し、発表後インフォーマルに彼女と自由に会員が話す機会を設けることになったという報告であった。Melanaは候補者の1人にはならなかったようである。その理由として、彼女は家族の都合でパートタイムが好ましい、もうひとつは彼女の所属が聖公会であることと関係があると述べている。同派と「和解のコミュニティ」は聖餐式について妥協しない点があるという。たしかに聖公会は「和解のコミュニティ」に合体する期待を初めは持っていたが、結局はそのことが実現しなかった。しかし、C. Thomas委員長（規則管理委員会）によると、その理由は、聖公会が当時「和解のコミュニティ」に同派の牧師をおくよう要求した点で、「和解のコミュニティ」側が妥協できなかったからであるとしている。また現在、聖公会のビショップが超教派から遠ざかる傾向の人であるということがそれを妨げている原因だと説明する人もあった。⁽²⁴⁾

牧師選考委員長（白人女性）の話によると、同委員会は10人以上の候補者のなかで、最終的に4人に絞って検討した。4人とも黒人で男女2人ずつであった。選考の基準は次の3つである。

セミナーを卒業していること

経験があること

黒人であること

さらに女性よりは男性を委員会は希望した。というのは、Gail 牧師が白人女性であるからその釣り合いの上からだという。しかし最終選考に残ったのは女性で、彼女は3年の経験があり、バンダビルト神学校の神学修士であった。

候補者Martha Opheの名前が再び会員に紹介されたのは6月26日であった。その時の説明によると、7月10日にMarthaに説教の機会が与えられ、それに基づいて会員が投票で彼女を招くか否かを決定することになった。

いよいよMarthaがテストされる日がきた。「このような時のために」というのがMarthaの説教のテーマであった。これはエステル書4章14節「あなたがもしこのような時に黙っているならば」から引いてきたテーマである。モルデカイが、妹のエステル（ユダヤ人という身分を明かす事なく国王にめとられた。）を通じ、同胞のユダヤの民を救うことになる物語がエステル書には記述されているが、説教の内容はキリストの愛の大きさを伝えようとしたものである。

礼拝が終わり、ただちに会員会議が開かれ、まず選考委員長から年収25,000ドルと何種類かの附加給付が示され、任用期間については未確定であることについての説明があり、次に質疑応答に入った。

（質問1）白人女性

黒人の男性牧師を見つけるということになっていたのではないか。

（答）委員長

4人の候補者がいて、そのうち2人が黒人男性であった。

（質問2）黒人女性

スミスフィールド教会（Marthaの現在の所属教会）ではどんな役割を果たしているのか。

（答）委員長

スミスフィールドはアパートの住民に対して布教活動をやってきているが、彼女は活発に貢献してきた。

（質問3）黒人女性

スミスフィールドでは教会員が増えているのか減っているのか。

(答) 委員長……。

投票の結果は賛成40反対7白紙1で、Marthaの望みがかなえられることになった。彼女は皆の拍手を受けながら会議室に呼び入れられた。筆者はこのあとMarthaを歓迎するお茶会で、彼女に「この教会を希望された理由は何ですか。」と尋ねてみた。彼女は「色々な背景の人が来ているから。私の両親はカトリックだった。兄弟はメソジスト。そういう宗教的背景の家族から私は来ているので。」という答えであった。部外者にとって反対票の中身を読むのは難しい。あるインフォーマント（長老派系）によれば、反対者はキリスト合同教会と合同メソジスト教会系の人々であろうとし、また候補者が3年の牧師経験では足りないと考えた人や、説教の内容に満足しなかった人が含まれるかも知れないと述べている。

雇用条件である給料は決して高額とは言えないし、雇用期間も未定である。Marthaの夫は働いているからそれほど給料の額にはこだわりのないといえどそれまでだが、それ以上にこの教会はMarthaの心を捕えるものがあるのかもしれない。

現Gail牧師の場合は初めから牧師ではなかった。1972年から1会員としてこの教会に来ていたが、キリスト教教育委員会担当で活躍していた頃牧師職の提案があったという。こうしたことから推測すると、牧師というリーダーを得るにはエスニックな教会とは異なった難しさのある教会と言えるであろう。別言すれば「和解のコミュニティ」は社会のしきりに挑戦的であるだけに、それだけ適任な牧師を探すことは難しいと言うことであろう。選考委員会が考えていたような白人女性の牧師と黒人男性の牧師という組み合わせは、保守的なアメリカの人々には余りにもおぞましいものであるに違いない。

iv) 社会的関心

「和解のコミュニティ」が社会的関心を持つのはその創立の母体がメインラインの長老派に属していること、そして異人種統合を実施してきたこ

とからして当然と言うべきであろう。

次表は筆者の参加していた期間、毎日曜に配布される教会案内に記録されていた社会的問題を列挙したものである。

表1 社会的関心を示す行事

月 日	テーマ 〈主催団体〉
3 / 16	レバノンから人質を救い出せるのは誰か？ 〈COR〉
20	オスカー・ロメロ大司教記念エキュメニカルサービス—中央 アメリカ週間 〈COR〉
4 / 10	NAACP 人種の夕べ 〈ピッツバーグ NAACP 支部〉
16	善意を越えて（地域を越えた飢餓救済奉仕） 〈「世界にパンを」〉
27	飢餓救済奉仕ネットワーク1988年度会議
5 / 1	平和を願う異宗教間礼拝（国連軍縮会議支援のための日本山 妙法寺仏教徒主催世界平和行進一行を迎えて） 〈COR〉
7	人種相互作用と衝突解決 〈ピッツバーグ平和研究所〉
8	先住アメリカ人の土地権利と環境 〈COR 成人教育クラス〉
11	ピッツバーグ都市同盟（Urban League）1988年会議 〈ピッツバーグ都市同盟〉
15	先住アメリカ人の宗教と文化 〈COR 成人教育クラス〉
22	先住アメリカ人の子供と将来 〈COR 成人教育クラス〉 飢餓法に関する公聴会—市基金を近隣の食料置場に割り当てる法案
12	都市同盟員獲得運動 〈ピッツバーグ都市同盟〉
26	核軍縮促進行進アメリカ人・ソビエト人大陸横断

短期間の記録ながら、この表はどんな問題に関心があるかをかなりはっきり示している。行事を「和解のコミュニティ」が主催している場合は教会の建物内で行われている。例えば成人教育クラスは、アメリカ・インディアン問題を学ぼうと言うことになって、5月にこのようなスケジュールをたて、Three Rivers Indians Council⁽²⁵⁾ からインディアンを2名招き、話を聞くことにしている。2人のインディアン青年は実はこの地域出身者ではなく、アラスカ出身だという。彼らはアメリカ・インディアンとはいわず、あくまでアラスカ・インディアンだと言っていた。ピッツバーグ市にはインディアン人口は存在するとしてもごく僅かであろう。市の歴史にもインディアンはほとんど登場してこない。それだけにインディアンに関する市民の関心は強いとはいえない。またピッツバーグ大学にはインディアン研究の専門家もいない。そんな中で教会の成人教育クラスがインディアンに関心を持って取り上げたということは、彼らの社会的関心の1つの指標となろう。

黒人はインディアンに比べてピッツバーグ市の歴史と社会に決定的に大きな意味を持つ存在であった。市の全体の人口が減少傾向にある中で市の黒人人口は、既に述べたごとく、1960年には16.7%を占め、1980年には24.0%となっている。黒人地区の内H-B地区の人口増加は他に比べ著しい。また、1960年代の黒人L地域は暴動の嵐が吹き荒れたと言われている。

ピッツバーグの滞り8ヶ月間に人種差別がマスコミのそれらしい話題となった回数はごく少なかった。しかしこれはなにも黒人の社会的地位が安定し、問題がないからということでは決してない。

1988年4月4日のピッツバーグ・ポスト・ガゼット紙は Allegheny 郡（ピッツバーグ市の位置する）居住の黒人男子青年を対象にサンプル調査をした結果を報告している。それによればキング牧師暗殺から20年を経過した今日においても、社会・経済的事態は少しも改善されていないという。「ピッツバーグ都市青年行動」専務理事は、その結果を見て彼らの多くは21世紀に向かって生きる希望は持てないし、彼らの行き着く先は牢獄か失

望か死であると評している。⁽²⁶⁾

この現実に対して「和解のコミュニティ」は何をなしえるであろうか。極言すれば、表1で明らかなようにNAACPや都市同盟の活動に支援を送ること以外には何もなし得ないであろう。あるいは「ピッツバーグ平和研究所」主催の“人種相互作用と人種衝突の解決”のワークショップに積極的に参加する以外にはないであろう。このワークショップは個人レベルで白人と黒人が衝突した場合、それをどう解決していくか、参加者が事件の当事者、警官、市長などの役割を演じながら解決への努力をするというものであった。これはいかにも対処療法的ではあるが、実際に必要とされる“技術”なのであろう。お互いに役割を演じ、問題を解決しようとするプロセスで黒人の立場がしばしば無視されること、黒人を差別する“権力”がどこにあるかを学び、認識させる点では意味のあるワークショップであった。

同じく表中の5月1日に行われた行事として平和を願う異宗教間礼拝のことがあげられている。それは日本からはるばるやってきた仏教徒とアメリカ人の平和行進参加者を教会に招き、彼らのメッセージを聞き、彼らを支援する行事であった。この時に「和解のコミュニティ」はエキキュメンカルを越えてインターフェイス(interfaith)へと一時的ではあるにせよ、発展したのである。社会的問題の共通認識でそれへの積極的関わりがインターフェイスを生み出している事実を無視できないであろう。

「和解のコミュニティ」にとって、福音を述べ伝えることと、人種・核・平和問題の解決に向けて1つの宗教団体として努力することとは今後とも切り離せないであろう。その両者のバランスをいかに的確にとれるかということがリーダーシップをとるものの要件とさえいえないだろうか。「和解のコミュニティ」にとって人種・核・平和問題のうち、人種問題は最初から取り組んできた問題であるが、核や平和のような新しく出てきたグローバルな問題の方が実践的に取り組みやすいのではないだろうか。そしてその実践から福音を伝える力を得ることができる。国内問題としての

人種問題はあまりにも内に入り込み過ぎていて対応が難しいという側面を持っていると考える。

むすびに

「和解のコミュニティ」は、将来その同類を生み増やしていくことができるであろうかというのが、6ヶ月の参加の後に私が自らに問うてみたことであった。それはあまりにも大きな挑戦をアメリカ社会につきつけてきた。

人種の統合計画は1960年代に挫折し、以来統合という言葉それ自体一般に使用されることがめっきり少なくなってしまった。黒人、特に若い黒人たちにとって、単なる統合は大きな魅力ではなくなってしまった。「和解のコミュニティ」が人種の統合を声高く叫んでも、それだけでは人は引き寄せられないという会員がいるのももっともだと思われる。

この教会が教派を越えたことの意味は大きいに違いない。著しい数のエスニック・チャーチがあるピッツバーグで、その存在は確かに象徴的意味を十分に持っている。その象徴は力を持ち、市民に訴え続けるであろう。しかし同時に、エスニック・チャーチの力も大きいことを認めざるを得ないし、アメリカ社会がエスニック集団の存続を許し、共存、競争する社会であるかぎり、エスニック・チャーチの果たす役割は大きいであろう。

「和解のコミュニティ」が階級差をも越えようとしていることはそこに集まって来る人々の職業や居住地域を見れば容易にうなづけるところである。

私は6ヶ月の参加中にできるだけ多くの会員に接してその職業を聞いてみた。会員全部とはいかなかったが、その数は55人（白人男子15人、白人女子22人、黒人男子8人、黒人女子10人）であった。彼らの職業を人種別、男女別で分類してみると、白人男子の職業階層が著しく高いことがわかった。黒人男子は一部が公務員である他はブルーカラーが多く、白人男子との懸隔は著しい。ウェスチングハウスの重役（白人）や地方紙の副編

集長（白人）がいるかと思えば、他方では失業者（黒人）や定職のない人（黒人）がいる。黒人の年輩層にはTolliver牧師と一緒にベルフィールドにきた人が現在でも会員の中に数人いるが、彼らはすでに職場から離れ、年金生活をしている人たちである。白人の年輩層はごく少数でいわゆる専門職から退いたような人々である。白人女子は一部に専門職、他は教員（小中高校）社会福祉関係の仕事に従事し、黒人女子では専門職が少なく、その点で白人女子との差がある他は大体類似していることが分かった。

私は上記の地方紙の副編集長に、「和解のコミュニティ」は、人種、教派、階級を乗り越えることを強調してきたが、将来このうちどれが最後まで障壁として残ると予想されるであろうかと聞いてみたことがある。それに対して彼は多分階級であろうと答えた。

アメリカの階級が将来どの様に変化するか予測できないが、階級が消滅することはないであろう。人種と教派と階級がどの様に結び付き、今後存在してゆくであろうか。あるいはそのうちのいずれが早く社会概念としての意味を持たなくなるであろうか。「和解のコミュニティ」の現状は、人種の差が居住地域の差を、そしてまた職業上の差と結び付いていることを示している。それらの違いはまたライフスタイルの差と関係があろう。

こうした差が「和解のコミュニティ」の諸委員会のリーダーシップと無関係ではないことは明白である。こうした差がある以上、白人会員は絶えず黒人会員の立場を考慮することにより、教会としての統一が保たれていくというふうに思われる。人種を越え、教派を越え、地域を越え、階級を越えようとする教会としてそれは大変挑戦的存在であるが、ピッツバーグは地域的にも文化的にもエスニック・バウンダリーのはっきりした社会であり、そのバウンダリーは差別の解消によってなくなることはないであろう。この「和解のコミュニティ」が、そうしたコンテキストの中で地盤を築いていくのは、容易なことではないだろうと思うのである。

注

- (1) 古屋 pp.19-49
- (2) 古屋 口頭
- (3) Plotonicov p.4
- (4) Bodnar p.13
- (5) Bodnar p.59
- (6) Bodnar p.214
- (7) Bodnar pp.22-23
- (8) Bodnar p.74
- (9) U. S. Dept. of Commerce p.35
- (10) Bodnar pp.221-230
- (11) Plotonicov 口頭
- (12) Worthington 口頭
- (13) 通称 Oakland Church
- (14) この名称の由来は The Confession of 1967 の
Part I. God's Work of Reconciliation (pp.14-18)
Part II. The Ministry of Reconciliation (pp.19-24)
Part III. The Fulfillment of Reconciliation (pp.24-25)
を読むことでよりよく理解される。
- (15) The Community of Reconciliation pp.1-2
- (16) The Community of Reconciliation p.2
- (17) Pittsburgh Post-Gazette 1964/7/25 p.9
- (18) Clarke Thomas 口頭
- (19) Walter Worthington 口頭
- (20) インフォーマントにより、最初に来た人数にかなりの差がある。しかし最終的に留
まったのは30~35人とみられる。
- (21) Thomasによれば、Bellfield Presbyterian Churchからの参加者は少なかったが、他
所から白人が加わったので、半々位になった。
- (22) Pittsburgh Post-Gazette 1982/10/2 p.5
- (23) Pittsburgh Post-Gazette 1982/10/2 p.5
- (24) Cris Ward 口頭
- (25) 75部族が関係しているという。
- (26) Pittsburgh Post-Gazette 1988/4/4 p.1

文献

- Bodnar, J., Simon, R., & Weber, M. P.
1983 *Lives of Thier Own— Blacks, Italians, and Poles in Pittsburgh, 1900-*

- 1960—, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, Illinois Books
- The Community of Reconciliation
- 1978 *We've Come This Far By Faith—Oral Histories of the Beginning—Tenth Anniversary Celebration, April 14-16*
- 吉屋安雄, 1978 『激動するアメリカ教会』 ヨルダン社, 東京.
- The General Assembly of The United Presbyterian Church in the U. S. A.
1966, 1967 *The Book of Confessions*, Philadelphia
- Plotnicov, L.
- 1988 *Pittsburgh: A Promotional Image* (prepared for the 12th International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, Zagreb, Yugoslavia, July 1988)
- U. S. Dept. of Commerce
Statistical Abstract of the U. S. 1989, 109th edition
- Pittsburgh Post-Gazette

THE COMMUNITY OF RECONCILIATION
— Its Challenge to Racism and Denominationalism
in American Society—

《Summary》

Kiyotaka Aoyagi

This is a report of my study of a religious body called "The Community of Reconciliation" in Pittsburgh. The study has aimed at examining the interplay between race, class and religion which is an essential concern of my long term research topic: What constitutes American ethnicity?

The Community of Reconciliation was organized as the result of a voluntary incorporation between the Grace Memorial Presbyterian Church in a middle class Black community and a white Presbyterian church called Bellefield Presbyterian Church in the vicinity of the University of Pittsburgh. Its foundations were laid through the leadership of Grace Memorial and the deliberate efforts of the University and City Ministries of Pittsburgh. The Majority of Grace Memorial Church members joined the Community of Reconciliation, but the majority of Bellefield members opposed the interracial mingling and moved to another place in order to maintain their own segregated church.

About four years after its inception, the Community of Reconciliation became ecumenical, supported by five denominations. Besides its commitment to an interracial and ecumenical church, it has actively involved itself in social issues such as civil rights and peace movements. In addition to these distinctive features it has become inter-class in the composition of its members, whose residences are dispersed

throughout the city.

Amid the majority of prosperous ethnic churches in Pittsburgh the Community of Reconciliation has been striving to maintain a non-ethnic character. Its strength as a congregation stems from the willingness and devotion of its members, in spite of differences in their racial and denominational backgrounds. But its weakness, as reflected in lopsided leadership, seems to arise from differences in the social status of its membership which includes an executive of a big corporation as well as an unemployed Black. Discords also arise from differences in cultural traditions in Black and white churches in general.

The leadership problem may be hard to solve since it is inseparable from social status in a wider social context. Apart from that, successful leadership may depend upon an intricate balance between the Community's devotion to the Gospel and the degree of its commitment to social issues. We recall, for instance, that the cause of the decline of the Protestant mainline churches in the 1960s was the active involvement of church leaders in social issues. Their excessive commitments and actions estranged church members. As far as cultural gaps are concerned, various attempts have been made and consultations undertaken to ease the situation, but again it may not be easy to bridge them completely since such gaps may not be able to be separated from the racial and ethnic separations existing in the wider social context of Pittsburgh.